

身体の内側を満たしていた膨張感と圧迫感が、ペニスが抜かれていくに従って、開放感へと置換していく。千夏は嬌声をあげながら、放心したように身体の力を抜いた。色っぽい様子ではうっと息を吐いている。

「ああ……気持ちいい……」

千夏は腰をくりんとまわした。抜けでようとするペニスに対し、もっとちようだいたいとおねだりしているみたいだ。

ペニスが先端の肉の実だけを残してほとんど出てしまうと同時に、空に浮かびあがるのではないかと思うほどの快感が襲ってきた。排泄の快感に似ていたが、もっと濃密で純粹な快楽だ。

「あああつ。イツちやうよおつ！」

だが、彼女はイケなかった。鳴海が千夏の腰骨をもう一度しつかりと持ち直すと、ズウンと挿入したのである。空から地面に突き落とされた気分だった。開放感が圧迫感に、快感が膨張感に取って代わる。

「や、やめてええっ！ あうっ、やああつ、イカせてっ！ へ、ヘンになるうっ」

絶頂を極めるタイミングをはぐらかされた彼女は、腸壁をキリキリと締めながら淫靡な様子で腰をまわした。肛門括約筋がペニスを締めつけ、動きが一瞬とまったが、

次の瞬間にはフワリとゆるむ。

「ウッ、日向……ウッ、ウッ」

鳴海が挿入するに従って、肉茎を取り巻くアナル粘膜が内側に向けてベコンとへこんだ。奥までおさめてから再び引き抜くと、またペニスの周囲にドーナツ状の盛りあがりができる。

「ひああんっ！ やああっ！ やあああああっ!!」

千夏は甘い悲鳴をあげていた。極端から極端へと振りまわされ、脳髓までもシエイクされてしまいそうだ。

気持ちいいのか悪いのか、やめてほしいのか、つづけてほしいのかさえわからない。「ああっ、あうっ。だめえっ。い、いや……いやああっ！」

悲鳴に近い千夏の声と、汗を吹きこぼしふるえる白い肌、汗を吸って変色しているユニフォーム、結合部のアナル粘膜がへこんだり盛りあがったりする様子は、男をさらにけしかける。

先生は、彼女の腰をつかみ直すと、本腰を入れて責めはじめた。

「ウッ……ウッ……」

うなり声をあげながら、四つん這いの小柄な女子高生の腰骨を抱き、グイグイと律



動する。少女の薄いお尻に腰が当たるとき、パシンと軽い音がたつ。

「いやああっ……ああ、熱い、よ、おっ！　だめえええ。ヘンになるうっ」

挿入につれて交互にやってくる苦痛と快感は、もつれ合いながら円を描くようにして上昇しはじめた。尾骨の内側を穿<sup>うが</sup>たれるにつれて、苦痛がわずかになっていき、やがて快感だけが千夏を満たした。

「イイツ、あああつ、こ、こんなああっ！　怖いっ。おかしくなるうっ！」

怖いほどの快感に襲われた彼女は、弱々しくもがきはじめた。壁にすがって立ちあがろうとして、壁紙をがりとかきむしり、またずると床に伏してしまふ。タクトップに包まれた乳房が壁に密着する。

「あつあつ……あつ……か、感じる……」

快感がすぎると苦しくなる。ふうつと意識がとぎれた。まるでブレーカーが落ちたみたいに、周囲が真つ暗になった。

——あ、失神する……。

身体は、綿のように疲れている。目をつぶり、失神の安息に身体を委ねようとしたとき、鳴海先生が前に手をまわすと、秘芽と乳首をぎゅつとつぶした。

反応が鈍くなった千夏に喝<sup>かつ</sup>を入れようとしたのだろうが、サディスティックな行為

だった。

「あああつ。だめえええつ！ 感じるよおつ!!」

感じやすくなっていた彼女の身体は、与えられるすべての感触を快感に変えてしまふ。苦痛を伴う快感は甘い毒のように彼女の身体を駆けめぐる。

彼女は壁にかけている手に力を入れると、壁際に沿って立ちあがりはじめた。あまりの快感から逃れようとしてもがいているのだ。だが、先生は、千夏が暴れるほど興奮が増すようで、しっかりと少女のお尻を持ち、さらに激しく律動している。

「い、いや……感じるっ！ 苦しいよおつ。もう死ぬうっ」

ようやくのことで立ちあがることに成功したが、四つん這いから立位でお尻を突きだして挿入されている姿勢になっただけで、事態は少しも変わらない。それどころか、角度が変わり、よけいに深く腸壁を穿たれてしまふ。

——に、逃げたい……。

快感が強すぎて絶頂を迎えるタイミングが合わない。もつとくたくたに疲れていた。千夏は身体をひねりながら床に伏した。競技チアの演技でいうハーフツイストだ。ぬぷりとペニスが抜けた。

身体は床に落ちたにもかかわらず、フワッと浮かびあがるような陶酔がやってきた。